

海外
特別取材編



▲ラテン語の授業風景。右の女生徒が、フランスにおける弁論大会で優勝した子。



▲ドイツの中学生の挙手は、人さし指をかざす独特のもの。



▲西洋絵画に出てくるプロンド・ヘアーの子どもたちが目につく。



▲ハフオーマンズの祖 ヨーゼフ・ボイスの弟子であった先生によるアートの授業



▲各自のデスクがない職員室。思い思いのテーブルでコーヒーを飲み、語り合う先生たち。



▲お母さんたちの運営による学校内食堂。食材の仕入れはとても安く行われている。



▲もちろんケータイも、彼らの必須アイテムだ。



土の香りも豊かな中学生の園芸作業風景。



※7はハイブリット・ホル・ケガムトシュレ。※8はワルドルフ・シュレ。それ以外は全てニコラウス・クザーヌス・ギムナシウム。

※32ページからの記事もあわせてお読みください。



「ドイツ教育」の現在 第1回

「自主性を育てる」教育

「戦後教育」という視点を、おそらくはこの国も持つ。ゲーテやカント、ベートーベンを生んだ、文学と哲学と音楽の国の現在の教育を、特別取材によってルポ。



小野フェラー雅美
(通訳者・執筆家)

ドイツの学校システムと特性

ドイツの学校は州の管轄になり、州ごとにその制度が大分違う。小学校は4年制で（ベルリンとブランデンブルク州は6年制）、たいてい6歳で入学する。たいてい、というのは成長の早い子は5歳で入学させたり、ゆっくりな子は入学を1年遅らせることがよくあるからだ。その後、主として成績により、基本的に次の四つの種類の学校へ推薦によって進学する。

- (1)ギムナジウム…終了試験が大学進学資格となる、8年または9年制の学校。（日本の小学5年から高校3年、または大学1年に相当、中高一貫校に小学校高学年を足した形）
- (2)実業学校…6年制で、成績がよいと途中で(1)に簡単に移れる。（小学5年から高校1年相当）
- (3)基礎学校…5年制の本課程学校で、ここでも(2)への移行可。（小学5年から中学3年相当）

(4)統合学校…上記の(1)・(3)が統合されたもの。形態、名称、年数が州によって違うため、簡単に図示できないほど複雑である。

もちろん、小学校の推薦がない学校へも、保護者や生徒本人の意向が強ければ無理なく進学できる。だが、ここから、「入るのは楽だが出るのが難しい」ドイツの学校システムが始まる。

ドイツでは小学校から続けて数えるので、日本の中学校にあたるのは、7年生から9年生である。義務教育期間も州によって異なるが、最低、基礎学校終了までの8年または9年間とそれに上乗せされる3年間の専門学校や職業学校である。それと並行してわずかなシェアで、日本ではシュタイナー学校として知られている小学校から高校まで一貫のヴァルドルフ学校¹⁾があり、これは私立である。他の学校形態は、数少ない私立校を除くと州管轄の公立校である。特筆すべきは、上記の「入るのは楽…」の部

分。各種の学校では留年が普通に行われ、(1)から(2)、(2)から(3)へ転校したり、またはその逆に成績がよければ(3)から(2)、(2)から(1)の学校へ転校するなど、校長同士の連絡によって空きがあれば簡単に移ることができる。要するに、決まった内容のものが決まった期間内に習得できない生徒には時間が与えられ、できる生徒には性格の違う学校へ移ったり飛び級の機会が与えられるのだ。クラス編成の平均は25人弱²⁾だ。

ここまででお分かりのように、9年生（中3相当）のクラス担任になると、日本より幅広い年齢の子どもたちが同じクラスにいることになる。また、子ども目から見れば、ギムナジウムに11歳で入ると20歳くらいまでの生徒と一堂に会することになるので、上級生をある種の「大人への憧れ」をもって見上げることになる。また、ドイツの16歳は地方選挙権を持ち、ビールが許され、18歳で成人となると同時に選挙権は

1) 人哲学創始者ルドルフ・シュタイナーが1919年に最初の「シュタイナー校」をヴァルドルフ療育協会の依頼で労働者子弟のための学校として創立。当時のシュタイナー理論に忠実な学校^{a)}と時代変化に応じたシュタイナー理論の適応を資格にした学校^{b)}とがある中の一校。



校長先生による中学生へのラテン語の授業。
(ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウム)

人の生徒が、ビデオの回る前で面接試験を受ける。A君はコンピュータ・プログラマー志望。シューメンズ社のプログラマー部門の面接に来たという想定。学校の情報学の先生と共にプログラミングの部活を受け持つ彼は、得意とするところを堂々披露。難なく15分の面接が終わると、クラスメートたちが次々と意見を言う。「自分のできること、やってきたことを正確によく伝えていた」「でも、全体がちよっと硬い感じだった」「ナーバスな印象を受けた」。そこで皆でビデオを観た。確かに体勢が15分間まったく変わらない。落ち着いているようでも、組んだ上の足が小刻みに震えている。

次はB君。笑顔でしっかりと握手。爆破専門技師志望の彼はダイナマイト・ノーベル社の面接に来たという想定。面接者は、これはどういう職業だと思うか、と訊ねる。化学の得意な彼は、それには爆破自体に関わり爆薬を仕掛ける爆破専門技師と、立て込んだ大都市でのビルの破壊作業を担当する爆破専門技師と、それら全てを監督する爆破専門技師の3種類があり、自分はその3番目の技師のポストのため面接に来た、と語る。向かい側に座っている女生徒が右手を閉じたり開いたりしてB君に信号を送る。それをキャッチした彼はすぐ背筋を伸ばし、「そのために僕は、大学では物理と化学を専攻しました」と続ける。デイスカッション。「初めの笑顔がよかった」「途中で気づいて背筋をのばした」云々。人事課長は「握手にも力があって初めからとても好印象だった。ちよっと頑末な内容に入りすぎた部分もあったが、このままだけは大丈夫。成功を祈るよ」とB君に握手。担当教師は一切口を出さず、最後のコメントもなく、ただこの仮面接の場を見学していた。

ノルトライン・ウェストファール州の学校では、8〜11年生(中2〜高2)の間に2〜3週間の職場・企業研修が推奨されている。研修を通じて、希望していた職種に対して、自分が全く違ったイメージをもっていたことがわかったり、新しい職種を見つけたりするのだ。学校指導の研修に触発され、夏休みなどにアルバイトも兼ねて別の企業で研修する子が増えている。

から質問するクイズマスターはY君。X君は演劇部と連絡を取り、パツハヤモーツァルトがかぶっていたような髪とローブを借りる。Y君とZ君が4人でその日出し合った質問を20にまとめて提出レポートを作る。W君は4人で100円くらいずつ出し合ったお金で、ウィーン製のモーツァルトチョコレットを賞品として買い、X君と一緒にモーツァルト作品によるクイズのBGM作りや、「これはモーツァルトの曲か?」という質問用に、なかなか聴き分けが難しいベートーベンのピアノ曲やスカルラッティやビバルディのバイオリンの曲などを入れたテープ作りをして、準備を整えた。

発表は1時間2グループ。最後にそれぞれのグループから代表を出して⑦のグループのクイズに挑戦する。早く答えた者が勝ち。5が最高点で合計点が最高のグループにチョコレットがわたった。この研究発表を、A先生は生徒たちに評価させた。「どのグループが1に値すると思う?」という形だ。内容からも文句なく⑦の4人が1。地理の先生と連絡を取り合ってたモーツァルトの旅行地図を作り、現在のその地の観光ポスターや当時と今の人口比較などを発表した③の3人が2をもらい、他のグループは3と4に分かれた。テーマが決められたこと以外は、授業時間外のグループによる自主学習で、A先生は枠だけ作り、発表内容には関与していない。

*

次はニコラウス・クザーヌス・ギムナジウム9年生クラスの英語の時間を紹介しよう。5年生で第一外国語が英語、7年生(中1相当)で第二外国語ラテン語、9年生(中3相当)で第三外国語フランス語を選んだ生徒が集まったクラスだ。この三つの外国語の組み合わせのためぎりぎり成立した12人編成のクラスである。英語はこの時点で読解、会話や筆記表現などで日本の高卒以上の力をつけていて、イギリスの学校との交換留学の体験をもつ生徒も何人かいる。英語教師はB氏。テストではなかなか1を与えないので、厳しい教師だが、生徒には定評がある。大きなテーマは「現代社会の諸問題」。ここでも生徒たちからそれぞれのテーマが集められた。そのテーマを六つに絞り、2人ずつのグループで2週間の準備期間を置く。英語によるイベントが行われ、評価される。それまでは、授業は普通に英字新聞の時事問題を読み進め、内容に関する意見を言い合う。

テストはよくても、授業中おとなしく、積極発言が少ないため、いつも3をもらっているSさんは、親友のTさんとのグループとなり、テーマは「クロロン賛否論」。彼女は本当はクロロン反対派なのに、賛成論を準備せねばならない。自分がこう言えばTさんはこう返すだろう、とチェスの手のように仮定した答え、反論、論駁

の準備を図書館、英語版National Geographicネットなどを使って授業時間外にする。前夜は興奮して眠れない。英語による15分のディベートは初めて。発音、論旨の明快さ、相手論旨の理解力、説得力、などの点について、クラスメイトと先生が評価する。結果、論敵Tさんを圧倒してクロロン賛成論が勝ってしまった。先生と同級生のSさんへの評価も全員一致の1。Tさんは論旨、論駁の弱さで3。先に述べたモーツァルトをテーマにした発表もそうだが、生徒評価が通知表評価決定の一部となった。

ドイツでも盛んな「自分にあつた職業選択」

ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウム9年生(中3相当)のクラスを、ある日、大手の保険会社の人事課長が訪れた。ドイツではたいいてい人事課長が、企業での入社試験の際面接を一部担当するので、その目で生徒たちの準備状況を見て仮の面接試験をしてみようわけだ。女子10人、男子15人のクラスでは前の週に担任から職業安定所のパンフレットをもらった以外は特別な指導はなかった。分厚いパンフレットには自分の希望する職業に就くために必要な教育、進路が詳説してある。もちろんインターネットでも調べておくよう、宿題が与えられていた。2時間続きのその時間中には自ら申し出た4

入学試験制度の今後

今回の締めくくりとして、上に述べた評価について一言。成績評価は教師や学校によってかなり違う。ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムなどでは上に例をあげた英語のB先生のようになり、評価が悪くなっても、厳しくやがいのある教師の方が、やる気のある生徒には人気がある。ギムナジウムでは12・13年生(高3・大1)はコース制となり、一部教師を生徒が選択できるため、その前段階(9、10、11年生)で様々な教師を生徒が評価し選択することになる。批判精神旺盛なドイツ特有の大学への準備だ。

また、逆に学校ごとに行われる最終試験アピトゥーア(大学入学資格試験)の平均点を上げるため、コース制が始まる前に、厳しいとされる学校から易しいとされる学校にゴソッと生徒が移ってゆくという現象もある。それも残念ではあるが生徒自身の判断である、と学校側は見ている。ピサ統計の後、とみに問題とされている学校の評価、地域、州間の評価の大きな差、そしてそれが客観的に把握されていない、という現状批判があるため、その対応策でドイツの学校、試験制度は大きく変わりつつある。ゆくゆくはギムナジウムは8年制となり、まずは州ごとの、次に全国統一のアピトゥーア(大学入学資格試験)を設ける方向に進みつつあるようだ。

5) PISA統計。OECDが実施する世界的な学習到達度調査。
* 連載内容については、州や地域によりかなり違う連邦主義に根ざした国での、動きつつある実態なので、これは必ずしもドイツ教育の典型像ではない。